

平成三十一年度

岡山白陵高等学校入学試験問題

国語

受験番号	
------	--

注意

- 一、時間は六〇分で一〇〇点満点です。
- 二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
- 三、開始の合図があつたら、まず問題が一ページから二〇ページまで、順になつてあるかどうかを確かめなさい。
- 四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に數えます。

―― 次の文章を読んで、後の問い合わせよ。

日本人はあきらめがいい。「①あきらめる」という動詞は、明らかにする、あるいは、明らかになることに由来する。事態がはつきりと明らかになれば、もはや、じたばたしてもはじまらない。「あきらめがかんじん」なのである。事態が明らかになつても、なお、何とか解決、打開の方策がないものかと思案をつづけるのを日本人は未練がましいと思う。すなわち、そういう人間は腹が未だ練れていないというわけだ。あるいは執念深いと考へる。執念が深いというのは、見方によれば大いに賞賛されてしかるべきことであるが、なぜか日本人はそれを嫌う。日本人にとつて執念とは醜いものなのである。

とはいっても、人間は窮地に立つたとき、そうかんたんにあきらめられるものではない。そこで日本人は窮地に追いこまれまいとして、その手前で立ちどまつてしまふ。つまり、事態をはつきりさせないようにするのだ。なぜなら、事態を明らかにすれば、あきらめる以外に手はなくなるからである。そうなつては困るので、事態を明らかにせず、その一步手前で立ちつくす。それが奥ゆかしいのである。奥ゆかしいとは、奥まで行つてみたい、「奥に行かまほし」ということだ。②奥まで行つてみたいのだが、しかし、行かずにとどまる、そうした境地を日本人はたいへん好ましいことと思うのである。なぜなら、奥へ行つてしまえば、すべてが明らかになつてしまい、明らかになれば、あきらめる以外にないからだ。

日本人は③イサギヨク、あきらめがいい民族と私はいつたが、それは裏を返せば、たいへん⑤オクビヨウだということである。だから、現実を直視することを好まない。好まないと、現実を直視する勇気に欠けているとみるべきであらう。そこで、つねに現実にヴェールをかぶせ、なるだけ眞実の姿を見まいとする。たとえば、「洛中^{らくちゆう}外^{ほか}図^ず屏^{びょう}風^{ふう}」などにみられるやまと絵には、③たいてい雲^{くも}が棚引^{たなび}いて画面のかなりの部分をかくしている。雲がこんなに低く垂れこめるはずはないから、これはけつして実景ではなく、④サクイにちがいない。つまり、日本人は都の風景を描くにも、そのすべてをあからさまに描写するのをこころよしとせず、現実を雲のヴェールでおおつてしまふのだ。

A、なぜ日本人は現実を直視したがらないのであらうか。私はその根底に、ある種の悲観的な心情があるのでないかと思う。それは現世を無常と観じ、苦と見る仏教の影響によるところが大きいにちがいない。しかし、日本人に限らず、この世が無常であり、人生に限りがあることは、どんな民族にあっても悲痛の種なのである。だからこそ、ギリシアにしても、インドにしても、その無常を乗り越えて常住なるもの、永遠なるものを希求したのだ。

B、日本人は永遠を欲しない。永遠なものなどというのは、むしろ気味が悪いのだ。ピラミッドを初めとして、多くの民族の王たちが例外なく永劫に自分の存在を残そうとして石の記念碑を建てているのに、日本にはおよそ、そうした王朝の記念物がない。すべて歳月に朽ち果てるままに任せってきた。日本の和歌の真髓は、〔注2〕後京極摂政藤原良経のつぎのような歌にあるとされている。

人すまぬ不破の閑屋の板びさしあれにし後はたゞ秋の風

④この歌に人びとが感嘆を惜しまなかつたのは、とくに「たゞ」という措辞〔注3〕に對してであつた。右の歌は、人の住まなくなつた閑屋の板びさしは荒れ果て、そこにただ秋の風だけが吹いているという侘しい情景を嘆じたものであるが、日本人は侘しいと思いながらも、こうした情景に限りない親しみを感じるのである。そこで、訪れるものはただ秋風だけ、というその「たゞ」という言葉を日本の歌人たちは、玄妙不可説、すなわち何とも④メイジヨウしがたい玄妙さと賛嘆〔注4〕し、正徹の「〔注5〕あなた、おそろし」とまでいつているのだ。このような二字でかくも深遠な心情を表現したことは、おそろしいまでだというのである。

その深遠な情感〔注6〕というのは、いうまでもなく、秋風が無常を奏でているということに対する日本人のあきらめと同時に、一種の安堵感〔注7〕である。この世が無常であることはたしかに悲しいことだ。しかし、それが明らかである以上、あきらめるほかはない。そして、あきらめてしまえば、そこに安堵感が生まれる。もはや、じたばたしなくてもすむからである。この歌の「たゞ」という措辞が日本の歌人に至言のように響くのは、無常な現実をあからさまにではなく、あの「洛中洛外図屏風」の絵に描かれている垂れこめた雲のように、秋風がそれとなく無常を奏でているからである。「たゞ秋の風」の「たゞ」は、秋風だけが、という意であるが、それは同時に、「わずかに秋風だけは」という

慰めにも通じていて。だれも訪^{おとな}う人はいない、けれどもただ秋風だけは、というある種の救いなのである。無常に直視する勇気のない日本人は、いつも現実にかすかな救いを見いだし、無常に甘える。無常の実相をとことん直視することを避けて、一縷^(注5)の慰めを見いだそうとする。^⑤だから日本人にとって、あきらめは安堵に通じているのだ。

(森本哲郎『日本語 表と裏』による)

(注1) 洛中洛外図屏風：京都市街である洛中と郊外である洛外の景観や風俗を描いた屏風絵のこと。

(注2) 後京極摂政藤原良經：後京極摂政は通称で、九条良經ともいう。平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての人物。

(注3) 措辞：文章や詩歌などの、言葉の使い方や字句の配置のしかた。

(注4) 正徹：室町時代中期の臨済宗の僧。和歌にも精通していた人物とされる。

(注5) 一縷：一本の糸。またはそのようにごくわずかなさま。

問1 線部①～④のカタカナを漢字に直せ。

問2

■A・■B

に入る言葉として最も適当なものを次のの中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア また イ では ウ したがつて エ ところが

問3

線部①「あきらめる」とあるが、この言葉から日本人のどのような考え方が見てとれると筆者は考えているか。それを説明したものとして最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えよ。

- ア みつともない悪あがきをしないために、物への執着は捨てるべきだ。
- イ 自らの人生を豊かにするために、一つの物事にこだわるべきだ。
- ウ 物事の全容を明らかにしてから、解決のための手を尽くすべきだ。
- エ 好ましくない結果が見えたとしても、ことの成りゆきを静観すべきだ。
- オ いかなる場合であっても、そつけない態度で行動するべきだ。

問4

線部②「奥まで行つてみたいのだが、しかし、行かずなどまる」とあるが、どのような心境か。わかりやすく説明せよ。

問5

——線部③「たいてい雲が棚引いて画面のかなりの部分をかくしている」とあるが、この「雲」のように、やまと絵に描かれるものは何を隠していると筆者は考えているか。本文中から五字で抜き出して答えよ。

問6

——線部④「この歌に人びとが感嘆を惜しまなかつたのは、とくに『たゞ』という措辞に対してであつた」とあるが、「たゞ」という措辞のどのような点に対しても賞賛しているか。それを説明した次の文の□Xに、それぞれ五字以内で適切な言葉を入れて説明を完成させよ。

人気のない荒れた家に吹く秋風が、日本人に人の営みの限界を□X一方で、必ず訪れる人生の終焉に直面する悲しみを□Y点。

——線部⑤「だから日本人にとって、あきらめは安堵に通じているのだ」とあるが、本文全体の内容をふまえて、その理由を説明したものとして最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えよ。

ア 日本人は、物事の本質を見抜く能力に長けており、現実が無常であることを常に想定し、追い詰められる前にいくつもの逃げ道を作つておくことで、余計な労力を割くことのない生活ができると考へるから。

イ 日本人は、物事の結末をはつきりさせないようにするために入間の生活から目を背けることで、自らをとりまく自然に目が行き届き、その自然を味わえる心安らぐ生活ができるようになると考へるから。

ウ 日本人は、現実を永遠ならざるものと悲観的にとらえつゝも、そういうものだと割り切つてもおり、一旦自分から望みを断ち切つてしまえば、もう無理に現実を直視はせずに済むという救いがあると考へるから。

エ 日本人は、積極的に事態を明らかにして、物事への執着を捨てて自然のなすがままに生きることで、死を受け入れ、安心して現世に別れを告げて来世に行くことができると考へるから。

オ 日本人は、自然に囲まれて暮らすうちに人間の生活のはかなさを強く実感するが、頼りない人間の生活を切り捨てて自然をたたえることで、力強い自然と一体化した頼りがいのある存在になれると考へるから。

―― 次は、原田マハの小説、『たゆたえども沈まざ』の一節である。この文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

一八七四年（明治七年）加納重吉は、旧加賀藩・金沢県から、官費生として県の支援を得て東京の開成学校に入学した。重吉は、外国の学問を本気で学ぶためには、海外へ留学するしかないと考えていた。

開成学校の校門から通りへ出たとき、ふいに背後から声をかけられた。

「Souhaitez-vous aller à Paris?（パリに行きたいんだって？）」

はつとして、立ち止まつた。

――フランス人？

振り向くと、見知らぬ日本人の青年が校門の傍らに立つていた。青年は、重吉の驚いた顔をみつめて、ふつと笑つた。

「①君は、なかなか賢明だな」

言いながら、重吉の隣へと歩み寄り、「行こう」と小声で言つた。

「おれたちがつるんでいると、^{ヨーロド・ラングル}英國一派がまたなんだかんだよからぬ噂^{うわき}を立てるだろう。……ちょっと付き合つてくれないか」

重吉の返事も聞かずに、そのまま、日本橋の茶屋まで連れ出した。

その青年こそが、林忠正であつた。

忠正は二十二歳で、開成学校が南校だった時代に廢藩置県まえの富山藩から派遣されて入学し、重吉の三年先輩だつた。^{注2}諸芸科に林という名の大変な秀才がいる、と噂に聞いてはいたが、重吉が直接会うのはそれが初めてのことだつた。

忠正のほうでも、三年下にとんでもない語学の秀才が入つた、と聞いて、こちらは当初から注目していたという。

「どれほどの秀才か、一度話をしたいものだと思つていたんだ」

茶屋に落ち着いたあと、忠正は、手酌で熱燄を飲みながら、ごくすなおな口調で言つた。

重吉は、自分が先輩であろうと④高飛車に構えず、まつすぐに好奇心を向けてくる忠正の様子に、たちまち好感を持った。

「聞けば、君は、庵野先生から頂いた英國留学への推薦を辞退したそうじやないか。大変な噂になつていてぞ。……英國留学といえば、出世の道が拓けたも同然じやないか。誰だつて飛びつきたいはずなのに、どうしてなんだ？」
「それは……」

重吉は、一瞬うつむいたが、すぐに顔を上げて答えた。

「……イギリスには、パリがないからです」

忠正は、きよとんとして、目を瞬かせた。それから、ぶつと噴き出して、笑い出した。あんまり笑うので、周りの客が皆、ふたりを見ている。重吉は、たまらなくなつて、

「林さん。……そんなに笑わないでくださいよ。笑いすぎですよ」

小声で言つたが、なんだか自分もおかしくなつてきて、つい、一緒に笑い出してしまつた。

気持ちよく笑い合つたあと、忠正は、「いやあ、いいな。實にいい」と、涙目になつて言つた。

「そうなんだ。その通り。イギリスには、パリがない。パリじやなけりやあ、意味がないんだ。おれもまつたく同感だ」

愉快そうな声でそう言つて、^{とっくり}德利を差し出した。

「さあ、飲んでくれ、^{モン・カマラード}我が同志よ。パリの話をしようじやないか」

忠正は、富山藩の医学の名門、長崎家に生まれ、その後、親族の林家の養子となり、家督を継いですぐに東京へ出て新しい学問を志した。特に、外国语を学ぼうと心に決めていた。

忠正が選んだのは英語ではなく、フランス語であった。重吉同様、彼もまた、多少⑤斜に構えているところもあつたのだが、ナポレオン公の物語に触れる機会があり、革命の嵐が吹き荒れ、ついにナポレオンが手中にした天下の都、パリに憧れて、フランス語を習得しようと決心したのだった。

② 学び始めた頃は、フランス語を学んでいるといえば、人の□A□も変わつたものだが、最近すっかり世の中の風潮は英語一辺倒で、フランス語を学んでいるといえば、変わつた人を□B□になる——と忠正はぼやいた。

「ときに、知つてゐるか。おれたちが在籍してゐるフランス語の諸芸科……今期で廃止されるそうだ」

えつ、と重吉は思わず身を乗り出した。

「まさか……まったく聞いていませんよ、そんなこと。それじやあ、僕らはどうなるんですか」

忠正は、「さあね」と人ごとのように言つて、勢いよく猪口ちょこをあおつた。

「フランスに行くほかはないな」

世界の列強国にくらべて、長いあいだ国を閉ざしてゐた日本は、もつと貪欲に自己主張をしてしかるべきだと、忠正は考えていた。

そのためには、世界中から富と人と文化が集まつてくるパリで、日本人が闘つてゐるところを見せてやろうじやないかという思いがあつた。

重吉同様、忠正もまた、フランス留学の道を探つてゐた。しかし、圧倒的に英語ができる生徒が増えたいまとなつては、高い公費を使つてフランスに留学生を送り込むくらいなら、イギリスかアメリカに送つたほうが人材を活かせるだろう、ということで、政府も学校も、フランス公費留学を廃止しようとしているらしかつた。

「やはり、狹き門、というわけですね……」重吉がつぶやくと、

「狭くつたつて、入り込む隙間があればいいさ。門は閉ざされたも同然なんだ。フランスのほうが、アメリカよりもずつと長い歴史と伝統があるし、イギリスに負けず劣らず文化も芸術もあるつてのに……こんちくしよう」

③ 吐き捨てるよう忠正が言つた。重吉は、返す言葉を失つて黙りこくつた。

ふたりは、しばらく黙つたままで、開いた障子の向こう側に流れてゐる隅田川すみだがわの支流を眺めるともなく眺めていた。やあつて、忠正は、ついと膝を立てると、

「氣持ちのいい宵だ。少し、歩いてみるか」と誘つた。

川面を渡る五月の宵風が、少し酔つた頬に心地よかつた。ふたりは、並んでそぞろ歩きしながら、日本橋のたもとへやつて来ると、どちらからともなく立ち止まつた。

川岸の杭に小舟が何艘も綱でつなぎ留められ、ぎいい、ぎいいときしんでいる。ちやぶちやぶと川水がその腹を叩く音が響き、磯の香りが漂つている。

重吉は、橋桁が川面に落とす闇の中で、生き物のように舟々がぶつかり合つてうごめくの眺めながら、もはや自分が活かされる道はないのだろうか——と、暗澹とした気持ちが胸の中に広がるのを感じていた。

傍らで長いこと沈黙していた忠正だったが、ふと顔を上げると、「なあ」と重吉に語りかけた。

「たゆたえども沈ます——って、知つてゐるか」

突然のことだ、今度は重吉が目を瞬かせた。忠正は、ふつと笑みを口もとに浮かべた。

「パリのことだよ」

「……パリのことだよ？」

「そう。……④たゆたえども、パリは沈ます」

花の都、パリ。

しかし、昔から、その中心部を流れるセーヌ川が、幾度も氾濫し、街とそこに住む人々を苦しめてきた。

パリの水害は珍しいことではなく、その都度、人々は力を合わせて街を再建した。数十年前には大きな都市計画が行われ、街の様子はいつそう華やかに、麗しくなつたという。

ヨーロッパの、世界の経済と文化の中心地として、絢爛と輝く宝石のごとき都、パリは、しかしながら、いまなお洪水の危険と隣り合わせである。

セーヌが流れている限り、どうしたつて水害という魔物から逃れることはできないのだ。

それでも、人々はパリを愛した。愛し続けた。

セーヌで生活をする船乗りたちは、ことさらにパリと運命を共にしてきた。セーヌを往来して貨物を運び、漁をし、生きてきた。だからこそ、パリが水害で苦しめられれば、なんとしても救おうと闘つた。どんなときであれ、何度でも。

いつしか船乗りたちは、自分たちの船に、いつもつぶやいているまじないの言葉をプレートに書いて掲げるようになった。

——たゆたえども沈まず。

パリは、いかなる苦境に追い込まれようと、たゆたいこそすれ、決して沈まない。まるで、セーヌの中心に浮かんでいるシテ島のように。

洪水が起くるたびに、水底に沈んでしまうかのように見えるシテ島は、荒れ狂う波の中にはあっても、船のようにたゆたい、決して沈まず、ふたたび船乗りたちの目の前に姿を現す。水害のあと、ことさらに、シテ島は神々しく船乗りたちの目に映つた。

そうなのだ。それは、パリそのものの姿。

どんなときであれ、何度も。流れに逆らわず、激流に身を委ね、決して沈まず、やがて立ち上がる。

そんな街。

それこそが、パリなのだ。

「⑤ なあ、シゲ。……おれは、いつかきっと行く。行つてみせる。たゆたえども、決して沈まない街……パリに」

シゲ、と親しみを込めて呼ばれて、重吉は、水面にたゆたう小舟に放つていた視線を、傍らの忠正に向けた。

忠正の横顔は、凜として風を受けていた。その瞳は、未来を見据えて輝いていた。

(注1) 開成学校：明治維新後、政府によって開校された西洋の各学科を教える「大学南校」が、幾度かの改変のうちに外国語と西洋の学問の専門学校となつたもの。最終的には一八七七年に東京医学校と合併して東京大學と総称されることになる。

(注2) 諸芸科：法学、理学、工学の三つの専門学科に対して、総合的に一般教養と語学を学ぶ学科である。

問
1

線部④「高飛車に構えず」、⑤「斜に構えている」の、本文中の意味として最も適当なものを次のの中から
それぞれ選び、記号で答えよ。

- ア 「高飛車に構えず」 イ 「斜に構えている」
- オ ウ エ ウ オ エ ア
- ④ 「高飛車に構えず」
⑤ 「斜に構えている」
- 話を一方的に進めようとせず
興味の指向性が一致していないことを気にせず
初対面であるということを気にせず
自分を立派に見せようと気負わず
自分が偉いということを押しつけようとせず
素直でなく気取っている
他人の話を信じすぎる
自由気ままに行動する
他者に対して攻撃的である
熟慮よりも勢いを大事にする

問2

——線部①「君は、なかなか賢明だな」とあるが、これはどういうことについて言っているのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 重吉が忠正のフランス語での呼びかけに正しく応答したこと。
イ 重吉が英国留学への推薦を辞退しパリへ行きたいと考えていること。
ウ 重吉が金沢県から官費生として支援を得て開成学校へ入学したこと。
エ 重吉が学校から海外留学の推薦を受けていること。
オ 重吉が忠正の誘いに対して素直に応じたこと。

問3

——線部②「学び始めた頃は、フランス語を学んでいるといえば、人の□A□も変わったものだが、最近すっかり世の中の風潮は英語一邊倒で、フランス語を学んでいるといえば、変わった人を□B□になる」とは、「フランス語を学ぶ」とに対する世の中の評価が一変したこと」を言い表したものだが、□A□と□B□には、見かけ上同じ言葉が入る。ここに当てはまる言葉を二字で答えよ。なお、□A□は「一語の名詞」、□B□は「動詞十名詞」とどちらえることができる。

——線部③「吐き捨てるよう忠正が言った」とあるが、「」で忠正は何に對して腹を立ててゐるのか。その説明として最も適當なもの次の中から選び、記号で答えよ。

ア 日本が世界の列強国と渡り合うには、日本人があらゆる言語に精通し学問を身につける必要があると考えているが、その思いとは裏腹に、日本政府や学校は西洋の文化や芸術を重視するばかりで、学問や言語は軽視しており、このような不眞面目な発想を憎むとともに、自分の思い通りに行かない現状に対して憤つてゐる。

イ 日本が世界の列強国と渡り合うには、植民地にされる前に自らが世界に対して戦争を仕掛ける必要があると考えているが、その思いとは裏腹に、日本政府や学校は西洋人と戦うのを避ける傾向にあり、このような消極的な発想を憎むとともに、自分の思い通りに行かない現状に対して憤つてゐる。

ウ 日本が世界の列強国と渡り合うには、経済と文化の中心であるフランスから学び、フランスで日本人の活躍を見せる必要があると考えているが、その思いとは裏腹に、日本政府や学校は費用対効果の薄いフランス留学を差し止めようとしており、このような安易な発想を憎むとともに、自分の思い通りに行かない現状に対して憤つてゐる。

エ 日本が世界の列強国と渡り合うには、イギリスやアメリカと関わるのをやめて日本独自の文化を創り出す必要があると考えているが、その思いとは裏腹に、日本政府や学校は経済発展のためだけにイギリスやアメリカへ人材を送るうとしており、このような不純な発想を憎むとともに、自分の思い通りに行かない現状に対して憤つてゐる。

オ 日本が世界の列強国と渡り合うには、英語だけでなくフランス語も学んで世界中に情報を発信する力を持つ必要があると考えているが、その思いとは裏腹に、日本政府や学校は世界的な言語である英語を身につけただけで満足しており、このような中途半端な発想を憎むとともに、自分の思い通りに行かない現状に対して憤つてゐる。

問5

——線部④「たゆたえども、パリは沈まづ」とあるが、忠正はパリをどういう街だと言いたいのか。わかりやすく説明せよ。

問6

——線部⑤「なあ、シゲ。……おれは、いつかきっと行く。行つてみせる。たゆたえども、決して沈まない街……パリに」とあるが、忠正はどういう思いを持つてこう言つていると考えられるか。ここまで文脈をふまえて説明せよ。

問 7

この文章の表現や内容についての説明として適當なものを次の(一)～(四)選び、記号で答えよ。

ア この文章では、「重吉の返事も聞かずに、そのまま、日本橋の茶屋まで連れ出した」に象徴されるように、二人の関係は終始忠正のペースであり、重吉が忠正に与えた良い影響はまったく無いと言える。

イ この文章では、「重吉は」「忠正は」というように三人称で語られているが、その中でも重吉の気持ちが中心的に語られているので、視点人物は重吉であると言える。

ウ この文章では、「……ちょっと付き合つてくれないか」や「……英國留学といえ巴」「など「……」が多用されているが、多くは次の言葉を発するのに強いためらしいがある」とを表現したものである。

エ 「重吉は、返す言葉を失つて黙りこくつた」や「傍らで長いこと沈黙していた忠正だったが」のように、

本文中には重吉や忠正が黙る場面が多くあり、互いに気が合う割には会話が弾んでいないことがわかる。

オ 本文終盤の、「そうなのだ。それは、パリそのものの姿」「そんな街。それこそが、パリなのだ」という

表現から、忠正が重吉と話をしていることを忘れて、自分の世界に入り込んでいることが読み取れる。

カ 重吉が、川面にたゆたう小舟眺めながら現状を悲観しているタイミングで、忠正が「たゆたえども、パリは沈まづ」と言つたことは、重吉の人生に何かしらの光明をもたらすものと予想できる。

三

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。なお、本文に三か所ある「右」とは、「先述（の）」という意味である。

天明元年に酒井雅樂頭(注1)台命(注2)を蒙り上京ありしが、雅樂頭はいまだ壯年にて常に紳(注3)を愛しけるが、①右の内最愛の紳は在所往来にも②召し連れ給ひしが、この度(注4)公(注5)の重き御用故連れまじき由(注6)の所、③出立の日に至り駕籠(注7)を放れず。近習のもの駕籠へ入れじと防ぎしに、或いは吼え、或いは喰ひついて手に余りぬれば、品川の駅(注8)より返しなんとて品川まで召し連れ、右駅に至りける故是より返しなんと色々なしぬれど、兎角(注9)に屋舗(注10)にてのとほり故、④是非なく上方まで召し連れけるに、よき犬にやありけむ、⑤京(注11)にも其の沙汰(注12)ありて、天聴に入りぬれば、「⑥畜類ながら其の主人の跡を逐ふ心の哀れなり」とて、六位(注13)を賜はりとかや。是を聞きて事を好む殿上人の口すさびや、亦は京童(注14)の申しけるや、

くらひつく犬とぞ兼てしるならばみな世の人のうやまはんはん

右は根なし事にもあるべけれど、其の頃所々にて取りはやしける故、ここにしるしぬ。

(根岸鎮衛『耳囊』による)

(注1) 酒井雅楽頭：酒井忠たださね以のこと。江戸時代に姫路十四万石を所領した。

(注2) 台命を蒙り：將軍の命令を受けて。

(注3) 狆：犬の一品種。室内で主に飼われる小型犬。

(注4) 公の重き御用：光格天皇の即位に際し使者の役を拝命したことを言う。

(注5) よき犬にやありけむ：よい犬だったのだろうか。

(注6) 六位：位階の一つ。

(注7) 殿上人：上級貴族。

(注8) 京童：口さがない京の連中。

問1 線部①「右」とは何を指すか。十五字以内で答えよ。

問2 線部②「召し連れ給ひし」の動作主として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えよ。

ア 酒井雅楽頭 イ 將軍 ウ 狆 エ 公 オ 近習のもの

問3

——線部③「出立の日に至り」とあるが、この時の酒井雅楽頭の旅程について、その「出発地」と「目的地」を、それぞれ現在の都道府県名で答えよ。

問4

——線部④「是非なく上方まで召し連れける」とあるが、どうしてこのような事態になつたのか。わかりやすく説明せよ。

問5

——線部⑤「京にも其の沙汰ありて」とあるが、これはどういうことを言つているのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 都でも酒井雅楽頭が狹をかわいがつてゐることが噂されたこと。^{うわさ}

イ 都でも酒井雅楽頭が狹を連れて上京したことで非難されたこと。

ウ 都でも酒井雅楽頭の狹のすばらしい毛並みが褒められたこと。

エ 都でも酒井雅楽頭が狹を連れて上京した理由が評判になつたこと。

オ 都でも酒井雅楽頭の狹を退去させるよう命令が下されたこと。

問6

——線部⑥「畜類ながら其の主人の跡を逐ふ心の哀れなり」の解釈として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えよ。

ア 動物の本性のままに、主人の後を追つていこうとする心はかわいそうだ。

イ 動物の習性に従つて、主人のにおいを追跡していこうとする心はあさましい。

ウ 動物の身であるけれども、主人の足もとにつき従おうとする心はけなげだ。

エ 動物の姿になつてまで、主君の後を追いかけようとする心はすばらしい。

オ 動物のくせに、主人の亡き後を追つて死のうとする心は驚くばかりである。

問7

次は本文中の歌についての説明文である。これを読んで、□X・□Yに当てはまる言葉を答えよ。

この歌には上の句と下の句に一か所ずつ、表現上の面白みをねらつた箇所がある。それは「くらひつく」と「うやまほんはん」である。前者は、二通りの意味にとれるように「くらひつく」を漢字に直すと、「喰らひつく」と「□X」というように書き表すことができる。また、後者は「犬を敬うだらう」という意味に、「□Y」をからませていることがわかる。